

展覧会

没後10年 映画監督 大島渚

Film Director Nagisa Oshima

2023年4月11日 [火] - 8月6日 [日]

国立映画アーカイブ 展示室 (7階)



『愛の七霊』(1978年)撮影スナップ ©大島渚プロダクション

絶えず映画の自由を追い求め、作品ごとに主題やスタイルを刷新しながら、時に社会の暗部をえぐる反逆者として、また時に映画の常識を破る冒険者として屹立する巨人、映画監督大島渚(1932-2013)を日本が失ってから早くも10年の歳月が経ちました。

若き日に松竹撮影所で生み出された鮮烈な『青春残酷物語』(1960年)や『日本の夜と霧』(1960年)、自ら興したプロダクション「創造社」を基盤に次々と送り出された『絞死刑』(1968年)、『少年』(1969年)、『儀式』(1971年)といった問題作、そして世界をセンセーションに巻き込んだ国際的合作『愛のコリーダ』(1976年)や『戦場のメリークリスマス』(1983年)——大島の作品群は日本の映画界ばかりか、日本社会そのものに大きな刺激を与え続けました。

この展覧会「没後10年 映画監督 大島渚」は、監督が自ら体系的に遺した膨大な作品資料や個人資料をベースに、その挑戦的な知性と行動の多面体に迫るものです。企画の監修には、それら資料を明るみに出した大著『大島渚全映画秘蔵資料集成』(2021年)の編著者・樋口尚文氏を迎え、同書の構成を踏襲しつつ当館独自のコーナーも加えて、その苛烈な映画人生を俯瞰します。

<見どころ>

- ・没後10年を迎えてなお声望高まる名匠・大島渚の豊饒な映像世界とその創作の舞台裏を、監督本人が体系的に遺した膨大な資料によって解き明かします。
- ・「キネマ旬報」誌が選ぶ「映画本大賞2021」で第1位を獲得した、樋口尚文氏の巨著『大島渚全映画秘蔵資料集成』の構成を踏襲、同氏と検討を重ねて同書掲載の膨大な資料群から厳選した重要資料を展示することで、大島の映画人生を一望します。
- ・資料群の中でも、これまで一切が現存しないと伝えられてきた美術監督・戸田重昌に関する各資料はきわめて貴重な存在です。『白昼の通り魔』から『戦場のメリークリスマス』に至る大島作品に関連したそれらの資料は、不世出の映画美術家の独創性を明るみに出します。
- ・会場では、大島監督作品劇場予告篇集のほか、大島映画を彩った五人の作曲家たち(真鍋理一郎、林光、武満徹、三木稔、坂本龍一)の音楽も視聴でき、大島の作品世界を映像・音響の両方から体験いただけます。

第1章

出生から学生時代、そして撮影所へ

1932年に生まれた大島渚は、農林省に勤めていた父親の都合で海に面した穏やかな土地で幼少期を送りましたが、尋常小学校に上がって間もなく父親が急逝、以降大学卒業まで母方の祖父母が暮らす京都で過ごします。1954年に京都大学法学部を卒業した大島は松竹に入社、大船撮影所で助監督として修業を始めます。野村芳太郎、大庭秀雄といった監督たちのもとで成長し、撮影所の若手によるシナリオ同人誌にも参加する中で、監督昇進への道が開かれました。本章では当時の写真や創作ノートなどから、大島の監督デビュー以前の時代をたどります。



学生時代の創作ノート (1950-1953年頃)

第2章

ヌーヴェル・ヴァーグの旗手として



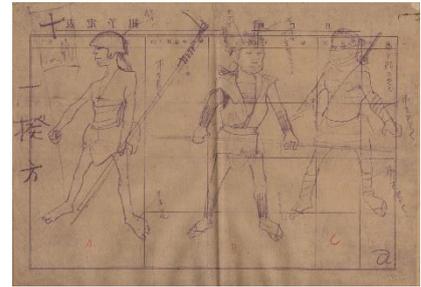
『日本の夜と霧』(1960年) セット平面図

長篇デビュー作『愛と希望の街』(1959年)は、会社の方針にそぐわぬ映画として冷遇されましたが、次作『青春残酷物語』(1960年)で鮮烈に描かれた若者の社会への抵抗と挫折は、一転して若き大島の名望を高めました。撮影所の同世代監督とともに「松竹ヌーヴェル・ヴァーグ」と呼ばれましたが、大島はそこに止まらぬ挑戦的な作品『太陽の墓場』と『日本の夜と霧』(いずれも1960年)を世に問い、日本映画界や日本社会への苛立ちを表現しました。本章では製作資料やスナップ写真などから、大島の松竹撮影所時代をたどります。

第3章

松竹退社と模索の季節

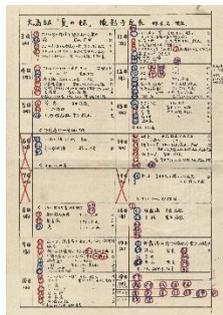
問題作『日本の夜と霧』の公開中止という事件をきっかけに、大島は松竹と訣別します。しかし、初の独立プロ作品『飼育』(1961年)、東映で撮影した『天草四郎時貞』(1962年)は成績不振に終わりました。すでに大島は自身の会社である創造社を興していましたが、映画の企画はなかなか成立せず、その間、大島はテレビ・ドキュメンタリーや記録映画に取り組みます。本章では松竹退社後から創造社の活動が軌道に乗るまでの大島の格闘の道のりをたどります。



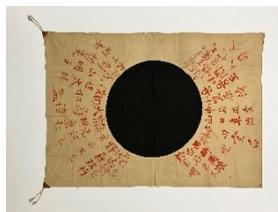
『天草四郎時貞』(1962年) 衣裳デザイン図

第4章

独立プロ・創造社の挑戦



『夏の妹』(1972年) 撮影予定表

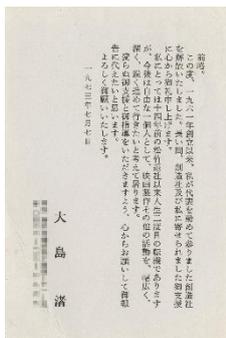


『少年』(1969年) キャストとスタッフによる寄せ書き旗

創造社が映画プロダクションとして活発になると、低予算映画とはいえ、物語や演出手法において自由を得た大島はさまざまな野心を炸裂させ、特に『白昼の通り魔』(1966年)は大島の復活を強く印象づけました。創造社チームの結末は『絞死刑』(1968年)、『少年』(1969年)や『儀式』(1971年)といった作品を通じて日本社会の現状を鋭く問い続けましたが、沖縄を舞台にした『夏の妹』(1972年)で終止符を打ちました。本章では大島の創造社時代をたどります。

第5章

創造社の解散と国際的活躍



創造社の解散通知はがき (1973年)

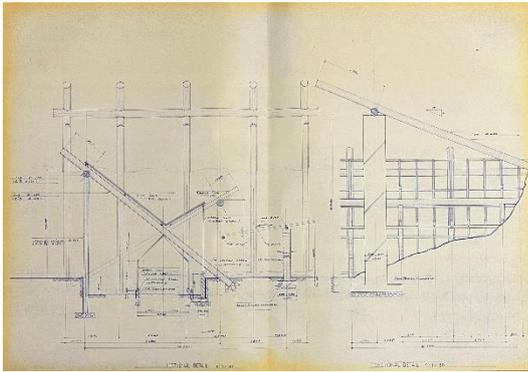
1973年7月、大島は突如として創造社を解散し、新たなスタイルの映画製作に向けて始動します。初の海外との合作となったのが、性表現の限界に挑んだ『愛のコリーダ』(1976年)です。以降、性や愛の問題を掘り下げた『愛の亡霊』(1978年)や『マックス、モン・アムール』(1986年)、そして異色のキャスティングで世界を驚かせ商業的にも成功を収めた『戦場のメリークリスマス』(1983年)を送り出します。本章では、大島がスキャンダラスな一面にとどまらない日本屈指の国際派映画作家へと飛躍した時代をたどります。



(左から)『愛のコリーダ』(1976年) フィルム断片 / 『愛のコリーダ』(1976年) 撮影スナップ ©大島渚プロダクション / 『戦場のメリークリスマス』(1983年) 映画企画書

第6章

大島映画の美的参謀、戸田重昌



『戦場のメリークリスマス』（1983年）セットイメージ図

製作環境が変化する中で、大島が全幅の信頼をおいて創造の現場を任せ続けたのが美術監督の戸田重昌です。温室のような『戦場のメリークリスマス』の捕虜収容所をはじめ、奇抜なアイデアに基づいた異様な造形物でも、それを映画のフレームに自然に溶け込ませる才を持つ戸田は、大島の映画哲学を受けて立つことのできる無二の存在でした。本章では、大島の手元で保管されていた資料を通じて、抽象芸術の作家を思わせるこの稀有なプロダクション・デザイナーに光を当てます。

第7章

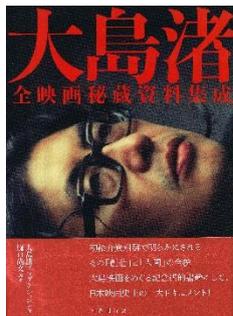
幻の企画と晩年

若き日から晩年まで、大島には未実現の企画が多数存在しました。中でも大がかりな企画が、1979年に東映製作で検討された大島流の実録やくざ映画『日本の黒幕』と、企画作りに6年をかけながら1992年に頓挫した、坂本龍一がハリウッド草創期の俳優早川雪洲を演じる予定だった『ハリウッド・ゼン』です。こうした苦闘の中、1996年に大島は脳出血を患い、その後のカムバック作『御法度』（1999年）は遺作となりました。本章では、晩年まで衰えなかった大島の創造への意欲とその痕跡をたどります。



大島渚監督（1975年頃）©大島渚プロダクション

展覧会関連書籍



『大島渚全映画秘蔵資料集成』

〔監修〕大島渚プロダクション

〔編著〕樋口尚文

〔発行〕国書刊行会

ISBN:978-4-336-07202-3 B5判・820頁

定価12,000円＋税

※全国の書店・各ネット書店で販売中。会期中、当館1階受付でも販売を予定しています。

関連上映企画



展覧会企画と連動して、企画上映「没後10年 映画監督 大島渚」を開催します。

企画名：企画上映「没後10年 映画監督 大島渚」

会期：2023年4月11日（火）－5月28日（日） ※月曜休館

会場：国立映画アーカイブ 小ホール [地下1階]

主催：国立映画アーカイブ 協力：株式会社大島渚プロダクション

HP：https://www.nfaj.go.jp/exhibition/oshima202303/

問合せ：050-5541-8600（ハローダイヤル）

※詳細は企画上映のHPまたはプレスリリースをご確認ください。

開催概要

	<p>没後10年 映画監督 大島渚 (英題 / Film Director Nagisa Oshima)</p> 
主催	国立映画アーカイブ
特別協力	株式会社大島渚プロダクション
監修	樋口尚文
会期	2023年4月11日〔火〕－8月6日〔日〕
休室日	月曜日および5月30日〔火〕－6月1日〔木〕は休室です。
開室時間	午前11時－午後6時30分（入室は午後6時まで） ＊4/28、5/26、6/30、7/28の金曜日は開室時間を午後8時まで延長いたします。（入室は午後7時30分まで）
会場	国立映画アーカイブ 展示室（7階）
アクセス	東京メトロ銀座線京橋駅下車、出口1から昭和通り方向へ徒歩1分 都営地下鉄浅草線宝町駅下車、出口A4から中央通り方向へ徒歩1分 東京メトロ有楽町線銀座一丁目駅下車、出口7より徒歩5分 JR東京駅下車、八重洲南口より徒歩10分
料金	<p>一般250円（200円）／大学生130円（60円）／65歳以上、高校生以下及び18歳未満、障害者（付添者は原則1名まで）、国立映画アーカイブのキャンパスメンバーズは無料</p> <p>＊料金は常設の「日本映画の歴史」の入場料を含みます。＊（ ）内は20名以上の団体料金です。</p> <p>＊学生、65歳以上、障害者、キャンパスメンバーズの方は入室の際、証明できるものをご提示ください。</p> <p>＊国立映画アーカイブが主催する上映会の観覧券（オンラインチケット「購入確認メール」、またはQRコードのプリントアウト）をご提示いただくと、1回に限り団体料金が適用されます。</p> <p>＊2023年5月18日（木）「国際博物館の日」は、無料でご覧いただけます。</p>
お問合せ	050-5541-8600（ハローダイヤル）
HP	https://www.nfaj.go.jp/exhibition/nagisaoshima2023/

【本展覧会に関するお問合せ】

国立映画アーカイブ 事業広報担当：横田／展示・資料室：岡田・藤原

〒104-0031東京都中央区京橋3-7-6 MAIL：pr@nfaj.go.jp TEL：03-3561-0823 FAX：03-3561-0830

広報用画像 & 読者プレゼント招待券 申請書

展覧会「没後10年 映画監督 大島渚」

送付先 国立映画アーカイブ 広報担当 メール：pr@nfaj.go.jp FAX：03-3561-0830

* 広報用画像をご希望の方は、本プレスリリースに掲載されている画像右下の番号をご参照の上、貸出を希望されるデータの口にチェックをつけ、上記の宛先までをご送付ください。

①	学生時代の創作ノート（1950-1953年頃）
②	『日本の夜と霧』（1960年）セット平面図
③	『天草四郎時貞』（1962年）衣裳デザイン図
④	『少年』（1969年）キャストとスタッフによる寄せ書き旗
⑤	『夏の妹』（1972年）撮影予定表
⑥	創造社の解散通知はがき（1973年）
⑦	『愛のコリーダ』（1976年）フィルム断片
⑧	『戦場のメリークリスマス』（1983年）映画企画書
⑨	『戦場のメリークリスマス』（1983年）セットイメージ図
⑩	『愛のコリーダ』（1976年）撮影スナップ ©大島渚プロダクション
⑪	『愛の亡霊』（1978年）撮影スナップ ©大島渚プロダクション
⑫	大島渚監督（1975年頃）©大島渚プロダクション

※太字の作品名・制作年・日本公開年・監督名・著作権表記は掲載必須です。

画像データ貸出希望日時	月	日	時頃までに希望
読者プレゼント招待券	組	名（合計	枚）希望します

プレス・イメージ貸出条件

1. 画像は、展覧会紹介の目的にのみご使用ください。2. データを第三者に渡すことは禁じます。使用後、画像データは消去してください。3. 展覧会の名称、期間、会場は、適切な場所、大きさを明示していただくようお願いいたします。4. 作品画像は全図で使用してください。部分使用やトリミング、作品に文字を重ねることはできません。5. 画像を掲載される際には、イメージ貸出時に添付するクレジットをご記載ください。6. 掲載紙（誌）は、1部、広報担当宛にご寄贈ください。webサイトの場合は、掲載時にお知らせください。

* 画像データ(JPEG)にてお貸出いたします。その際、一緒にお送りするキャプションもご確認ください。

* 掲載前に、校正紙をお送りください。お送りいただけない場合、掲載内容についての責任は当方では負いかねます。

お名前： _____ ご所属・媒体名： _____

出版物・放送番組名： _____

TEL： _____ FAX： _____

メールアドレス： _____